

学校教育の質の評価をめぐって： 論点の整理と日本における方向

「学校教育の質をどのように評価するか 学校の機能と評価」
学術会議シンポジウム
2010年3月5日

無藤 隆(白梅学園大学)

1. 評価すべき教育はどの単位か

- 国、都道府県、市町村、学校の分担は何か。各々の得意なところを明確にする。
- 保護者や地域住民の発言権はどこに置くか。
- 教育委員会の位置づけはどうか。教育委員会が各学校の評価と改善に責任を持つことを明確にする。
- 教育のどの面にどの単位が責任を持つかの整理と推進とが必要である。

2. 質のどこを評価するか

- 構造(設置基準)と過程(指導過程)のどこをどうやって評価するか。両面ともに必要である。
- 実際のやりとりの質か、教育の成果をとらえるか。成果をとらえ、それに至る授業等のやりとりの質を明らかにする。
- 教育の根ざすところの多面性を尊重するか、学力テストといった一面に限定するか。現状と伸びの双方を明らかにする。その組み合わせの工夫が必要になる。
- 最低基準か、最高基準か。行政として最低基準に責任を持ち、最高基準へのインセンティブを用意する。
- 学力格差に向き合い、データを元に評価し、改善を進めるべきである。

3. 誰が評価するか

- 自己評価か、行政による評価か、専門家・第三者評価か。その組み合わせをどうするか。
- すべての教育単位で誰が行うかが課題となる。
- 自己評価は学校の教職員による評価過程を丁寧に踏むのが望ましい。
- 専門家はその学校のあり方に通暁して評価すべきではないか。

4. 評価結果に基づき改善を進める

- 評価を自主的改善への支援に生かす。
- 予算・人事を含めた指導・命令を進めるのか。
- 改善におけるリーダーシップを教育委員会が取る事が重要ではないか。
- 学力の低さ、格差の大きさを重視して、集中的改善を図るべきではないか。
- 優れた学校や地域の総合的努力をすくいあげ、また試行的学校を育てる。
- 専門家による支援を組織化する。中核的教員を育成する。

5. 情報の公開を意味あるものとする

- 出来る限り、評価情報やその根拠データを詳細・具体的に外に出すべきではないか。地域住民や専門家に評価の詳細が見えるようにする。
- 質的なところやインフォーマルなものを外に示す工夫が必要である。子どもの姿・学校の姿を示す。
- 日常の授業の公開とそこでの指導の工夫を示していく。

6. 評価支援の仕組みを構築する

- 評価の方法・手法の開発を行う場が必要ではないか。
- 評価のやり方を助言し、改善の案を作るための支援の組織があつてよい。
- 外部評価を受け持つ認証される組織を作ること
も考えられる。
- それらは、公的な場を中核としつつ、民間の力も活用できるだろう。
- 評価専門家を育成する。評価の考え方や手法を理解する教員の研修を進める。